

物性  
物理学

大学教員

## 好きな事を見つけ自然体で生きましょう。

古川はづき（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授）

## 仕事の内容とやりがい

中性子という核子を用いて、物性の起源（どうしてその物質がその性質をもつか）を研究しています。現在は、特に、電子系が示す超伝導という性質について、物質の構造や電子がもつ磁石がその性質の発現にどのように関わっているかを調べています。研究の基本は理詰めをしながら物の本質を見抜くこと。その楽しさは迷路や探偵ゲームなどと似ています。データ収集は原子炉等の実験施設に滞在し短期間で一気にいきます。自分の仮説がその場で実証されるのも大きな喜びですが、その後それを論文という形で世界に発表する事からも大きな達成感が得られます。

## 仕事と生活のバランス

現在、小学1年生と2歳の二人の子供がいます。仕事と家庭のバランス維持が一番大変な時期と思いますが、大学がつけてくれる子育て女性研究者支援アシスタントが仕事を、また、家では夫が育児と家事を分担してくれます。普段は私ができるだけ子供の世話をしますが、年に数回ある実験期間中は、夫が朝食・お弁当の準備から寝かしつけまで全てを一人で行ってくれます。これら周りの人の理解と協力のお陰で研究者としての自分を保ち“大変!でも楽しい!!”と言える充実した日々を過ごさせてもらっています。

## 進路決定のきっかけ

大学入学に際し、英語、数学、物理、医学で選択を悩んだ瞬間がありました。で、最後は、自然現象に対する「どうして(= why)?」への好奇心と、机上では出来ない体験をしたいという思いから実験物理学を選びました。当時は研究者になりたいという目標は持っていませんでしたが、大学4年で体験した卒業研究で自分の創意工夫から様々な事を解決へと導く喜びを体感、大学院へと進学しました。そして、おもしろくてしょうがない事を満喫しているうちに、そのまま研究者になる機会を得ました。

## 進路選択に対してのメッセージ

将来長期間に渡って働く事を考えると、進路は、もちろん、自分の好きな事から方向性を決めると良いと思います。しかし、世の中はどんどん変化していますし、それに固執するのではなく、目の前のチャンスに柔軟に挑戦する勇気を持つ事も大事だと思います。大学では、人からもらう知識を頭に詰め込むだけではなく、何をしたいか、どうしたら良いか自分で考え、実動する訓練をしておきましょう。

## 海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

私があこがれの海外渡航を初めて果たしたのは、大学院の博士課程の時、実験のためのアメリカの研究所への短期訪問でした。英語もろくにしゃべれなかったのですが、世界が本当に広く、多くの人種がいて、それぞれ一生懸命に生きていることに感動しました。研究所には女性研究者も多く、みな生き生きと働いていて、まだまだ保守的だった当時の日本の環境と大きな違いを感じると同時に、自分もそのような環境で仕事をしたいと考えました。

## 海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

海外では、男女間、子供の有無で、研究生活にそれほど差が見えません。その理由は、彼らが同等の仕事をしている/任されているためだと思います。外国の研究機関には研究に関する技術サポート者が多くいますし、男女の隔てなく私生活の充実を願う事への偏見がありません。前者は、研究者が実験を計画/時間通りに推進するために重要なシステムです。また、後者については、保守的日本の感覚が世界のそれからだいぶかけ離れていることは否めません。日本が、男女ともに、もっと働きやすい環境になるとよいと思います。

## 海外留学・勤務を決めたきっかけについて

大学院時代の渡航をきっかけとして、理研でのポスト時代も積極的に海外の研究所で実験する機会や国際会議での発表の機会を作りました。そして、日本でのポスト期間が切れるときアメリカの研究所のポストを得ました。着任して間もなく今の大学への着任が決まったためたった1年でしたが、朝から晩まで研究一筋の本当に充実した研究生活を送りました。(実は日本の職が決まった直後、アメリカの別の研究所からも研究職のオファーを受けました。順番が逆だったら、今頃アメリカかも知れません。)



<古川はづき(ふるかわはづき) プロフィール>

都立高校→お茶の水女子大学理学部物理学科・修士課程→東京大学大学院→独立法人理化学研究所・基礎科学特別研究員→米国オークリッジ国立研究所・リサーチフェロー→お茶の水女子大学理学部物理学科助教授→JST・PRESTO「状態と変革」研究員(兼務)→同大学教授→<第一子出産>→その後、同大学大学院人間文化創成科学研究科に配置換え→<第二子出産>